前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション――宗教哲学とその基本問題

１．宗教哲学の歴史と伝統　２．理性と啓示　３．悪と神義論　（４．予定と自由意志）

５．形而上学と神

６．シュライアマハー

７．トレルチ　5/29

８．波多野精一　6/5

９．ブーバー　6/12

１０．ティリッヒ　6/19

１１．リクール　6/26

１２．研究発表１　7/3

１３．研究発表２　7/10

１４．研究発表３　7/17

１５．研究発表４　7/24

＜前回＞シュライアマハー

（１）シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

１．シュライアマハーとはいかなる思想家か

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。

近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父

宗教・信仰の直接的場（「感情」「直接意識」）

→　人間の存在構造における宗教性

②啓蒙思想とロマン主義の総合

『宗教論』(Reden)『モノローゲン』

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家　→　信仰論（『信仰論』(Glaubenslehre)）の影響

Dogmatik から Glaubenslehre へ

自由主義神学

・人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）

・実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教への定位　　cf.　理神論

高次の実在論

説教者

↓

自由主義神学の父、しかし自由主義神学の枠には収まらない。

体系的哲学構想（『弁証法』）に裏打ちされた宗教論

方法論としての解釈学の構築

（２）『宗教論』の信仰概念

２．信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学

宗教多元性の問題（第五講）

３．形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」(「本質－現象」の枠)

①直観と感情　→　人間存在
②形而上学と道徳から区別された「宗教」の固有性
③直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的
　　無限と有限という関連性　→　表現、象徴
④感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」
　　「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

（３）『信仰論』の意義

４．教義学の新しいスタイル
　・経験から教義へ
　・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化
　　倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ
　　「神」という言葉の規定

５．『信仰論』序説（Einleitung）
「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」
①教会概念、つまり敬虔さの分析は、倫理学からの借用命題によって行われる。
　倫理学：自由な人間の行為によって成立する共同体、あるいは人間の生の全領域を対象とする学問
②教会共同体の概念は、敬虔さ（Frömmigkeit）、感情（Gefühl）・直接的自己意識（das unmittelbare Selbstbewußtsein）に帰着する。
③感情は自己・人格的統合の一要素である。
④認識、行為、感情は感情を基盤とした動的な相互連関において統合されている。
⑤自己意識の現象学的記述と自己意識の「受動－能動」構造（ibid., 24f.）
・自己意識の記述・分析（倫理学からの借用命題、内容的には、自己意識の現象学的記述）
　感情あるいは直接的自己意識と生の統一性・動態との関わりから、「絶対的依存感情」へ。
⑥感情は、自由感情（Freiheitsgefühl）と依存感情（Abhängigkeitsgefühl）の両極性を持つ。
⑦自己意識の現象学は、他なるものとの関わりを介して、現存在の現象学へと展開される。
・自己意識の分析＝世界の内における自己の存在の在り方、我々の現存在の分析へと至る。
　　自己意識の構造の現象学的記述から、世界内における現存在の現象学的記述へ。
・世界：
　自己の存在は他から触発された受容性において成立し、常に他（人間的社会的関係や天体を含めた自然との関係）との相互作用の内に存在している。
⑧自己との相関性において、自己の起源は神として定義される。
・世界内の他者との関係：ここには絶対的依存感情は存在しないこと。
・敬虔さ＝絶対的依存感情：自己と神との関係。
　　しかし、特定の神観念 ── たとえ人格神であろうと ── を前提にしていない。
　「我々の自己意識において共に措定された、我々の受容的で自発的な現存在の起源（Woher）は、神という表現によって言い表されねばならない」（ibid., S.28f.）。
　まず、特定の神観念から、その神が現存在の起源であると主張するのではなく、むしろ反対に、現存在の起源の方が「神」と呼ばれるのである（神の定義）。

７．神学と哲学の関係（「リュッケへの第一書簡」）
８．信仰と学問の関係（「リュッケへの第二書簡」）

７．　トレルチ

・トレルチ（Ernst Troeltsch,1865-1923）。

Troeltsch was born in Ausdburg, Germany, and he taught at the Universities of Göttingen, Bonn, Heiderberg and Berlin. He also served for a time in the Ministry of Education. He is remembered for his *Die Absoluteheit des Christentums*, his *Der Historismus und seine Problem* and his *Die Sociallehren der Christlichen Kirchen und Gruppen*. Influenced by Albrecht Ritschl and also by the neo-Kantians, he maintained that religious claims must be understaood relative to their cultural contexts. He also is remembered in his sociological work for making the classic distinction between Church and Sect. He was highly influential on later thinkers such as Baron von Hügel.

R.H. Bainton, 'Ernst Troeltsch--thirty years after', *Theology Today*, vii (1950); S.Coakley, *Christ Without Absolutes: A Study of the Christology of Ernst Troeltsch* (1988) ; B.A.Reist, *Towards a Theology of Involvement* (1966).

（Lavinia Cohn-Sherbok, *Who's Who in Christianity*, Routledge, 1998, p.297.）

（１）リッチュル学派からの離脱

１．リッチュル批判

・「A・リッチュルから学んだこと」:「教義的伝承の判明な把握」「近代の精神的宗教的状況の同様に判明な把握」（森田、219）

↓

２．基本的課題「「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」」

「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」（219）

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」（220）

３．『社会教説』（Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912）

・社会教説：国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説

・キリスト教共同体の類型（理念型）：教会（Kirche）、分派（Sekte）、神秘主義（Mystik）

４．「キリスト教の本質」とはいかなる問題か。

cf. ハルナック（『キリスト教の本質』）とその『教理史』

原始キリスト教とその変質（ヘレニズム化）

『＜キリスト教の本質＞とは何か』（1903）。歴史的複合現象（Komplexerscheinung）としてのキリスト教→全体の総括的展望＋個別的な事象の厳密な把握

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質（本質規定とは本質形成である）。

「本質とは直観的な抽象であり、宗教的・倫理的な批判であり、活動的な発展概念であり、そして未来を形成し新たに結ぶ仕事を据える理想なのである。」（２，98）

５．近代プロテスタンティズムの二段階説（リッチュル学派との相違）

古プロテスタンティズム（Altprotestantismus）：宗教改革と 16、17 世紀のプロテスタンティズム、いまだ中世的である。自然法的権威主義的な文化。

新プロテスタンティズム（Neuprotestantismus）：啓蒙主義以降の厳密な意味での近代世

界。個人的自律の文化（個人主義的傾向を帯びた多元的文化）。統一的文化は未だ未成立。

（２）宗教史学派の神学

６．近代以降の神学の方法論的反省。シュライアマハー（Dogmatik から Glaubenslehre へ）からリッチュルへ至る展開過程の線上。

「神学における教義学的方法と歴史学的方法について」(Über historische und dogmatische Methode in der Theologie, 1900)

「教会的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教会的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想（佐藤、169）

「伝統的な教義学から決定的に彼を決別させたものは、近代的歴史意識とそれに伴う歴史学である」(169)

７．歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

・批判（Kritik）・類推（Analogie）・相互作用（Wechselwirkung）あるいは相関（Korrelation）

「キリスト教をも含む宗教史全体の包括的連関の中にキリスト教は置かれねばならず、キリスト教に関する評価も全体的連関からなされねばならない」(171)

→　方法論的現在中心主義

８．「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

・二つの研究方向

1) キリスト教の純粋に歴史的な研究

2) それに基づいたキリスト教の妥当性

・教義学の 4 つの課題

1) 諸宗教との比較を通したキリスト教の最高の妥当性の証明

2) キリスト教（歴史的連関において成立し様々な要素を摂取し発展してきた歴史的複合体）の本質が何を意味するか。

3) キリスト教の本質の叙述（＝狭義の教義学）

神、世界、人間、神の国、永生などの諸表象を含む

4) 教義学は学問的知識や方法を前提とするが、それ自体は、一種の信仰告白であり、説教や宗教教育の手引きである。実践に関わる。それ自体は近代的な学問ではない。

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

（３）カント的な宗教哲学の構想

９．心理学と認識論　→　カントの批判哲学による解決

経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判

「心理学的なものの中に含まれる理性が自己の活動を通じて自己自身を認識するという仕方で」「認識論的な循環」→「無限に繰り返されるべき課題」（177）

「ア・プリオリな基本概念」は「不断に成長」「自己修正的」

10．カント主義の拡張　cf. 波多野

認識論のみがアプリオリではない。精神活動の諸領域のアプリオリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する（心的現象）

↓ cf. ユングの元型（林道義）

11. トレルチの体系構想と宗教研究の位置：４つの学的テーマ
- 宗教現象の心理学的認識を可能にする普遍概念・類概念（宗教心理学）
- 宗教の真理内容（宗教認識論）、事実に対する価値、宗教的アプリオリ
- 歴史上の諸宗教の段階的な評価、宗教の理想への適用、歴史を貫いて遂行される真理内容の内的運動（宗教の歴史哲学）
- 生全体の中での意味、最も普遍的で原理的な世界知と宗教の主張する実在（神）との関係（宗教の形而上学）。ライプニッツ的。

（４）歴史主義の諸問題

12. 歴史主義と歴史相対主義

近代＝実在・現実の歴史化（大木英夫『新しい共同体の倫理 〈基礎編 上下〉』教文館）

歴史の多義性

↓

13. キリスト教の絶対性（普遍史）からヨーロッパ的文化総合へ

・1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschite

「救済宗教」「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」(199)

↓

・1922: Der Historismus und Seine Probleme、「ヨーロッパ主義」(Der Europasimus)

Q：

1) 歴史相対主義はニヒリズムか？ cf. H.R.ニーバー（『啓示の意味』）、パネンベルク

2) 普遍性とは何か？ 普遍性と個別性とは単純に対立的か？ 歴史内部で可能な普遍とは？

＜参考文献＞

０．『歴史主義とその克服』理想社、1956 年。

『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫、1959 年。

『トレルチ著作集』全 10 巻、ヨルダン社、1980-88 年。

1 宗教哲学 2 神学の方法 3 キリスト教倫理 4・5・6 歴史主義とその諸問題 7 キリスト教と社会思想 8・9 プロテスタンティズムと近代世界 10 近代精神の本質

『私の著書』創元社、1982 年。 『信仰論』教文館、1997 年。

『古代キリスト教の社会教説』教文館、1999 年。

１．武藤一雄『神学と宗教哲学の間』創文社、1961年。

２．熊野義考「トレルチ」(『歴史と現代 上』全集10巻、新教出版社、1981年)。

３．佐藤敏夫『近代の神学』新教出版社、1964 年。

４．森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。

５．大林浩『トレルチと現代神学』日本基督教団出版局、1972年、『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局、1981年。

６．柳父圀近『ウェーバーとトレルチ―宗教と支配についての試論―』みすず書房、1983年。

７．安酸敏眞 *Ernst Troeltsch. Systematic Theologian of Radical Historicality*, Atlanta: Scholars Press, 1986.、『歴史と探求――レッシング・トレルチ・ニーバー』聖学院大学出版会、2001年。

８．H.E.テート『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社、1988年(1985)。
９．近藤勝彦『トレルチ研究』上下、教文館、1996年。
10．佐藤真一『トレルチとその時代』創文社、1997年。
11. F.W.グラーフ『ヴェーバー・トレルチ・イェリネック――ハイデルベルクにおけるアングルサクソン研究の伝統』、『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会、2001年。
12．Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften.* 1-4, Scientia Verlag.
13．Ernst Troeltsch, *Kritische Gesamtausgabe*, Walter de Gruyter.
14．Ernst-Troeltsch-Gesellschaft：http://www.st.evtheol.uni-muenchen.de/troeltsch/index.html